

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～8）に答えなさい。

「人の目」と「効率性」によってがんじがらめになって、私たち自身の「生きる意味」が見失われているところに私たちの時代の病はある。a、いま私たちに求められているのは、私たちひとりひとりの「生きる意味」の自立である。しかし、一見私たちの自立をもたらすように見える、新自由主義的なグローバルイズムは私たちをますます効率性と他人からの評価に縛りつけ、私たちの「生きる意味の再構築」をもたらすものではない。

いまこそ、経済成長や数字に表される成長といった、私たちや私たちの社会を外から量的に見る見方だけではなく、「生きる意味の成長」といった人生の質に関わる成長を考えるべきときではないか。そうした「内的成長」をもたらす社会への転換が求められているのである。それは私たちが自分自身の「喜び」と「苦悩」に向かい合うことから始まる。そして、それは私たちの間のコミュニケーションのあり方の転換でもある。「内的成長」を育む様々なグループが生まれ、さらに仕事、学校、家庭といった場が私たちの「内的成長」の場へと転換していく。

（1）誰かから、あるいは社会から「生きる意味」を押しつけられるのではなく、私たちひとりひとりが「生きる意味」の創造者となる社会への転換がいまこそ必要だ。しかし、そうした転換に大きな危惧を持つ人もいることだろう。ひとりひとりが自分自身の「生きる意味」のもとに行動していたら、この社会はバラバラになってしまうのではないか。そもそもひとりひとりがやりたいように生きていけば、それは利己的な個人の集まりとなってしまう、社会の統合が取れなくなってしまう。

押しつけられた「生きる意味」ではなく、自分自身の人生を取り戻すこと、それは抑圧された自分自身から（我がまま）に生きることへの転換である。しかし、それはIで周りを意に介さない（ワガママ）となる可能性を秘めている。この（我がままーワガママ）問題はこれからの時代の大きな問題になるだろう。

（我がまま）と（ワガママ）の違いとは何だろう。また、（我がまま）への目覚めがどのようなときに単なる（ワガママ）になってしまうのだろうか。

b何が（ワガママ）と感じられるかは、社会によってかなり違うということをおきたい。例えばアメリカに行くと、多くのアメリカ人のあまりの自己主張の激しさに「エイコウする人が多い」「私がこうしたい！」ということを言い張るのが当たり前で、言わなければ何も考えていないと見なされ、日本のように「口に出して言

わなくても、何を考えているかを感じてくれる」社会が懐かしくなる。c 私たちから見ればかなりの「ワガママ」を言っても、「ワガママ」とは見なされない社会もある。しかしそうした社会でも、明らかに「ワガママ」ならば、強い調子で否定され拒否されるわけで、やはりそこには「我がまま」と「ワガママ」の差は存在しているわけだ。

(2) そうした文化の差、社会の差を考慮に入れつつ考えたいが、この「ワガママ」を嫌う日本社会でもこのところ「ワガママ」としか思えない振る舞いが増えてきているのも事実だ。電車の中で大声での携帯電話の使用はこのごろ若者よりも大人のほうを多く目にするようになった。商品へのクレームもあるところまでは消費者の当然の権利だし、製造者の改善のためにもなるが、<sup>イ</sup>「ヘンシュウ」的なクレームとなると話は別だ。子どものことで一方的に教師を責め立てる親。幼稚園や小学校の運動会は、自分の子ども「だけ」をビデオに収めたい親の場所取り合戦になり、お互いに「お前が邪魔なんだよ」とドゴウが飛ぶ。そしてインターネットの掲示板などで炸裂するボウジャク無人<sup>エ</sup>で<sup>II</sup>な発言など。こうしたらこんなに自己中心的に振る舞えるのかといぶかってしまうような場面にソウグウ<sup>オ</sup>することが少なくない。

そうした状況でいつも感じるのは、「人の目」を気にしてきた日本人がいったん「人の目」を気にしなくなったとき、そこには自分自身の行動を律する何ものも存在していないのだろうかということだ。例えば、町中の道の上で座り込んでいる若者たちに聞くと、「通行人は単なる風景で、人だとは思っていないから」という答えが返ってくる。「人の目」は気にするが、いったん「人」でないと思ってしまうえば何でもできる。そうした「ワガママ」な行動は、「人の目」に縛られてきた社会の反動ではないかと思えるのだ。

ルース・ベネディクトは、「人の目」から非難される「恥」を強く意識する日本文化を「恥の文化」と呼んだ。しかし、彼女はもうひとつの「恥」を見落としていた。それは「私としたことがこんなことをしてしまおうとは！」という、「自らを恥じる」という恥である。誰からも見られていなくても、恥じる。d、「こんなことをしてしまつて、ご先祖さまに申し訳ない」「亡き恩師の期待を裏切ってしまった」と、既に生きていない人に対して恥じる。日本人の倫理観は、単に自分の周囲の「人の目」だけではなく、先人たちや恩師たち、そして自分自身に対して恥ずかしいという感覚にも支えられていたのである。

しかし、そうした恥の感覚が薄れ、ベネディクトの言うように「人の目」のみを気にするように<sup>(3)</sup>「恥の文化」が縮小してしまい、それ故「人の目」が気にならなくなれば何でもやってしまうというのが現在の日本人の姿なの

ではないか。そして、そこには **Ⅲ** に欠けているものがある。それは自分自身に対する「自尊感情」だ。

自分自身に対する自尊感情がある人間ならば、「人の目」がないところでも、何でもやり放題ということにはならない。自尊感情とは自己信頼と言い換えてもいい。自分自身が尊い存在であるということに認めている人。尊重されるに足る存在だと感じている人。自己を信頼し、自尊心のある人は、「私としたことが、恥ずかしい」ということはあまりしないし、してしまっただににしても反省することないんだよ」と思っている人は、人の目がなくなってしまうほどなことでもできてしまう。自分という存在が、〈ワガママ〉な行動を律する歯止めにならないのだ。

〈我がまま〉が〈ワガママ〉に転ずるかどうか。それは、そこに自尊感情、自己信頼があるかどうかが多きな分かれ目になる。自己信頼に支えられた〈我がまま〉の追求は自分を生かし、他者も生かすものとなることが多い。しかし、自己信頼のない〈我がまま〉は〈ワガママ〉となって他人に多大な迷惑をかけるものになりがちだ。つまり、**Ⅹ**。

それは私たちの「敵討ち」であるとも言える。自己信頼や自尊感情は私たちが成長していく中で与えられるものだ。私自身が存在しているだけで喜ばしいことだと、親からの「無条件の愛」によって私は愛されるに足る存在だということを知る。あなたは尊重されるに足る存在だと、教師や友達たちから「私自身への信頼」をプレゼントされる。そうした経験によって私たちは自分自身が尊重され、信頼に足る人間だという感覚を身につけるのである。しかし、現在の日本社会は子どもたちの自尊感情を傷つけ、自己信頼を抑圧するような「生きる意味」のシステムを持っていた。「条件付きの愛」を与え、「いい子」を育てるような社会が続いてきたのだ。

多くの人たちは自尊感情や自己信頼の低さの陰で「恨み」を抱いている。あるがままの自分自身を認めてくれなかった親に、社会に恨みを抱く。「人の目」を押しつけて自分自身を抑圧するように仕向けてきた「生きる意味」のシステムに恨みと憎しみを抱いている。そして自由になつたら何よりもその恨みを晴らしたいと思っている。だから、いったん「人の目」から解放されてしまうと、私たちの行動は「敵討ち」になる。「人の目」によって抑圧されていた様々な行動がいつぱんに噴出し、とてつもない〈ワガママ〉になってしまうのだ。

恨みを持っている私たちは、「人の目」から解放され、思う存分「敵討ち」をすることが自己実現であり、人生の創造性の発揮であると思いがちだ。しかしそれは違う。恨みを晴らし続けても、自分自身の自尊心や自己信頼が

回復されなければ、私たちは永遠に「敵討ち」を続けなければいけない。それは創造性のある人生とはほど遠いものだ。

(上田紀行『生きる意味』より)

問1 カタカナで書かれた傍線部ア～オのうち、次の二重傍線部に当たる漢字として最も適切なものを、次の

①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は

1  
～  
5

| ア     | イ     | ウ     | エ     | オ     |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1     | 2     | 3     | 4     | 5     |
| ヘイコウ  | ヘンシユウ | ドゴウ   | ボウジャク | ソウグウ  |
| (1) 弊 | (1) 辺 | (1) 合 | (1) 傍 | (1) 偶 |
| (2) 閉 | (2) 編 | (2) 郷 | (2) 防 | (2) 遇 |
| (3) 併 | (3) 返 | (3) 号 | (3) 亡 | (3) 隅 |
| (4) 平 | (4) 偏 | (4) 豪 | (4) 冒 | (4) 宮 |
| (5) 並 | (5) 変 | (5) 業 | (5) 忘 | (5) 寓 |

問2 本文中の a ～ e に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ

選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。

解答番号は a 6 b 7 c 8 d 9 e 10

- ① このように      ② それ故      ③ しかし      ④ まず      ⑤ あるいは

問3 本文中の I Ⅰ Ⅲ に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ  
選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。

解答番号は

I Ⅱ 11

II Ⅱ 12

III Ⅱ 13

- ① 短絡的      ② 決定的      ③ 独占的      ④ 攻撃的      ⑤ 自己中心的

問4 傍線部(1)「誰かから、あるいは社会から「生きる意味」を押しつけられる」とあるが、筆者はどのような状態をそのように述べているのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

14

- ① ひとりひとりが自分自身の「生きる意味」のもとに行動してしまい、「生きる意味の成長」にあたる「内的成長」を見込むことができず、人生の質に関わる成長ができていない状態。
- ② 「人の目」と「効率性」によってがんじがらめになり、仕事、学校、家庭といった場で自分自身の「喜び」と「苦悩」を感じてはいても、「生きる意味の成長」が不可能である状態。
- ③ 新自由主義的なグローバルバリズムによって「ワガママ」な行動が増長し、「生きる意味」を考える能力が失われ、社会全体が利己的な個人の集まりとなって統合が全く取れなくなってしまった状態。
- ④ 社会が利己的な個人の集まりとなって統合が取れなくなり、やむを得ず効率性と他人からの評価によって「生きる意味」を見出すことを強いられている状態。
- ⑤ 自分自身の「喜び」と「苦悩」に向き合うことから始まる「内的成長」ではなく、経済成長や数字に表される成長といった、外から量られる見方によって「生きる意味」が構築されている状態。

問5 傍線部(2)「そうした文化の差、社会の差を考慮に入れつつ考えたいが、この〈ワガママ〉を嫌う日本

社会でもこのところ〈ワガママ〉としか思えない振る舞いが増えてきているのも事実だ」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 15

- ① 何が〈ワガママ〉と感じられるか文化や社会において違うものであり、文化によっては〈ワガママ〉が逆に好意的に捉えられることもあるのだが、本来は〈ワガママ〉な言動を使い分けることを求められる日本社会においても、〈ワガママ〉としか思えない振る舞いをする人々があふれるようになったということ。
- ② 文化や社会によっては、〈ワガママ〉な振る舞いが逆に評価されることもあり、〈ワガママ〉を嫌わないう文化や社会も実在するとはいえ、日本社会では昔から〈ワガママ〉を嫌う傾向にあったのだが、現在は〈ワガママ〉な言動をとる人々が多数派になってしまったということ。
- ③ どのような言動を〈ワガママ〉と見なすかは文化や社会によって違いはあるものの、どんな文化や社会においても〈我がまま〉と〈ワガママ〉の差は存在するのだが、本来〈ワガママ〉を嫌う日本社会においても、〈ワガママ〉な振る舞いが顕著に見られるようになったということ。
- ④ 〈ワガママ〉の捉え方には文化や社会の差が大きく影響し、〈我がまま〉と〈ワガママ〉が明確に区別されない場合もあるとはいえ、日本社会では〈ワガママ〉はひどく嫌われることが一般的であったのであるが、近年は日本においても〈ワガママ〉とは見なされない振る舞いが増えてきたということ。
- ⑤ 何を〈ワガママ〉と感じるかには文化や社会の差が存在するが、〈我がまま〉はどんな社会においても存在し、日本人は特に〈我がまま〉を敏感に感じてきたのであるが、以前は強い調子で否定され拒否されてきた〈我がまま〉な振る舞いが、現在は頻繁に目撃されるようになったということ。

問6 傍線部(3)「恥の文化」が縮小してしまい」とあるが、これはどのようなことを意味しているのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 16

- ① かつての日本人は「人の目」からの非難される「恥」を強く意識する一方で、故人や自分自身など、「人の目」以外に対して「恥」を認識する倫理観を持ち合わせていたが、現在の日本人はその場にいる「人の目」だけに対して「恥」を感じるように、「恥」を感じる対象が縮小してしまったということ。
- ② 以前の日本人は「人の目」からの非難を強く意識し、常に「人の目」を基準とした倫理観をもとに自己の振る舞いを行ってきたが、現在の日本人は「人の目」のもとで「恥」と感じることをすらすら珍しくなってしまう、日本人特有の感覚である「恥の文化」を喪失してしまったということ。
- ③ 本来の日本人であれば「人の目」をあまりに気にしすぎるあまり「恥」を強く意識することに対して一種の劣等感を抱いていたものであるが、現在の日本人の若者は自分自身の行動を律する歯止めを持ち合わせておらず、「人の目」を気にしないことで自由奔放に行動するようになってしまったということ。
- ④ 日本文化とは、一般的に「人の目」から非難される「恥」を強く意識する文化と認識されていたが、既に生きていない人や自分自身に対して感じる「恥」の感覚こそ本来の日本文化として認識されるべきであり、「人の目」のみを気にする「恥の文化」と考えることは軽率だということ。
- ⑤ 現代の日本人は、「人の目」に縛られてきた社会の反動から、かつて持っていた先人たちや恩師たち、自分自身に対して恥ずかしいという「恥」の倫理観を捨て去ってしまった上、自分自身の行動を律する存在そのものをもひどく拒絶するようになったということ。

問7 本文中の空欄  に入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

- ① 〈ワガママ〉な行動を律するためには、心の中に自尊心と自己信頼を育み、さらに他者からの信頼を勝ち取る行動が重要になってくる
- ② 「自尊心」にとられるあまり〈我がまま〉に生きることが難しい社会である以上、〈ワガママ〉な行動を抑圧することには多大な困難が伴うのである
- ③ 〈ワガママ〉を〈我がまま〉に転換し、他者を尊重する土台をつくりさえすれば、現代の日本人にはびこる〈ワガママ〉な行動を抑圧することが十分可能なのである
- ④ 現在の〈ワガママ〉が横行する社会は、私たちひとりひとりの自己信頼、自尊心が低い社会であることの裏返しだと言えるのである
- ⑤ 〈ワガママ〉を〈我がまま〉に変換できない社会は、到底自己信頼や自尊心を取り戻すことのできない未成熟な社会ということになる



問8

本文の内容と合うものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は

18

① 外部の評価に依存しない「内的成長」を取り戻すためには、自分のありのままに生きることが大切であるが、日本人特有の「恥」の感覚を喪失してしまった現代の日本人は「ワガママ」な行動を頻繁に起こすようになり、「人の目」からの解放はかえって自らを苦しめる結果に至った。

② 「人の目」や「効率性」に強要されたものではない「生きる意味」を取り戻すためには、自尊心を取り戻し、自己信頼に基づいて生きることへの転換が必要であるが、社会に強いられた自尊心の抑圧に対する反動から、誤った自己実現による自分本位の行動が目立つようになった。

③ 他人からの評価にとらわれていた振る舞いを捨て去り、自己を中心とする振る舞いを目指すことが自分自身の人生を取り戻すということにつながるのであるが、現代の人々は自己信頼や自尊心を失っているので、本来の「内的成長」を育むために「生きる意味」のシステムの再構築が必要となっている。

④ 「人の目」に縛られてきた社会によって自尊心を失ってしまった人々の多くが利己的に振る舞うようになったのであるが、そのような振る舞いは真の創造性の回復とは言えず、それには周囲の人々による自尊心や自己信頼の回復が必須の要件となっている。

⑤ 他者から「生きる意味」を押しつけられる社会からの脱却には、個人の利己的な振る舞いを排除する社会への成長が必須であるが、自尊心や自尊心を否定され続けた反動が人々を自分本位の行動に駆り立て、創造性のある人生の実現を阻止しているという現状がある。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。

科学至上主義は科学に限界はおかないが、それは褒め殺しのようなもので、かえって科学を危うくする。逆の科学不信は、限界をあまりに大きく見過ぎてその詳細を吟味しようとしないう傾向がある。いずれも、科学の限界を正しく把握しているとは言えないのだ。科学と社会が密接な関係にある現代において、科学ライサンにも科学否定にも陥らず、科学がどうあるべきかを考えることが望ましい態度なのではないだろうか。以下では、私が構想する科学の姿を少しばかり提示してみたい。

文化とは、芸術・芸能・哲学・思想・道徳・宗教・祭祀など人間の精神的活動の所産のことで、当然科学も文化の一つである。a 一九世紀半ばまで科学は自然哲学であり、自然が投げかける謎に挑戦する純粋な文化の営みであった。二〇世紀に入って科学の原理が技術に活かされるようになり、科学は文化という枠を越えて物質的所産である文明の建設に勤しむようになった。科学は制度化・軍事化・技術化・商業化を通じて変容したのである。それによって、国家というスポンサーの意向を斟酌するようになり、軍事体制に組み込まれ、生産に役立つことが奨励され、知的財産（知財）を蓄積すべく運命づけられた。これらが課している限界（言葉を換えれば大きな期待）によって、「好奇心の趣くまま」の自由を楽しんでいた科学は息苦しい状態になりつつある。まるで、オリンピックに参加するスポーツ選手が国家の名誉という重い荷を背負わされるようになっていなくもない。

私は、科学が再び文化のみに寄与する営みを取り戻すべきと考えている。壁に飾られたピカソの絵のように、なければならぬで済ませられるが、そこにあれば楽しい、なければ何か心の空白を感じてしまう、そんな「無用の用」としての科学である。世の中に役立つというような野心を捨て、自然と戯れながら自然の偉大さを学んでいく科学で良いのではないだろうか。好奇心、探究心、美を求める心、想像する力、普遍性への憧れ、そのような人間の感性を最大限錬磨して、人間の可能性を拡大する営みのことである。

b、経済イッペンントウの現代社会では、そんな I 科学は許されない。一般に文化の創造には金がかかる。ましてや科学は高価な実験器具やコンピュータを必要とするから一定の投資をしなければならず、そうすれば必ずその見返りが要求される。「文化より明日のコメを」という声も絶えることがない。社会もムダと思われ、るものに金を投ずるのを忌避するからだ。それが「役に立つ」科学とならねばならない要因で、科学者もセールス

マンのように次々目新しい商品を用意して社会の要求に迎合していかねばならなくなる。それを逆手にとって、あたかも世の中を牛耳っているかのようにならざるを得ない。これほど社会に貢献しているのだから、もっと金をよこせというわけである。金を通しての科学者と社会の綱引き状態と言えらるだろうか。それでいいのかと改めて考え直してみる必要がある。確かに科学には金がかかり、それには社会の支持が欠かれない。「無用の用」にすらならないムダも多いだろう。 c、ときに科学は世界の見方を変える大きな力を秘めている。事実、科学はその力によって自然観や世界観を一変させ、社会のありように大きな変化をもたらしてきた。社会への見返りとは、そのような概念や思想を提供する役目にあるのではないか。それは万に一つくらいの確率であるかもしれないが、科学の営み抜きにしては起こり得ない貢献である。むしろ、天才の登場を必要とする場合が多いが、その陰には無数の無名の科学者がいたことを忘れてはならない。それらの積み上げがあつてこそ天才も活躍できるのである。

今必要なのは、「1文化としての科学」を広く市民に伝えることであり、科学の楽しみを市民とともに共有することである。実際、本当のところ市民は「役に立つ科学」ではなく、「役に立たないけれど知的なスリルを味わえる科学」を求めている。市民も知的冒険をしたいのだ。それは「はやぶさ」の人気、日食や月食や流星群に注がれる目、ヒッグス粒子発見の騒動などを見ればわかる。そこに共通する要素は、「物語」があるという点だ。科学は冷徹な真理を追い求めているのには相違ないが、その道筋は「物語」に満ちている。科学の行為は科学者という人間の営みだから、そこには数多くのエピソードがあり、成功も失敗もある。それらも一緒に紡ぎ合わせることによつて「文化としての科学」が豊かになつていくのではないだろうか。それが結果的に市民に勇気や喜びを与えると信じている。

その「物語」を貫く一つの芯として、科学（および科学者）の倫理を据えなければならぬと思う。科学には二面性があり、善用も悪用も可能なのである。飼ひ慣らしてはたはたの科学の所産が、ひとつ間違えば大きなサイヤクとなり得る。生活に役立つ民生用にも、人を殺す軍事用にも転用できる。人々に大きな利益をもたらす一方、最初から反倫理性を内包している科学もある。科学は、それらをどう考え、社会はどうか選択していくべきかを語る「物語」でもなければならぬ。 d、科学者としての倫理を研ぎ澄ませることが必須であろう。

現状において、多くの科学者が社会の先導（扇動？）役を任じている。科学のマイナス面を一切述べず（あるいは

は過小評価し、プラス面ばかりを過大に吹聴するばかりであるからだ。特に経済的利得や安全・安心を過大に強調する。e、そのように語ることが世の中の役に立っていると矜持きょうじを持っているためだろう。

原発が事故を起こした後、原子力の専門家はIIな推移ばかりを語り、放射能の専門家は微量放射線は何ら恐れるに足りないと言った。この場合は、マイナス面を過小評価したのである。人々が不安でパニックになっ  
てはいけないという配慮からだと言われたが、それは本当に人間を大切にしたい行為なのだろうか。少なくとも、上からの目線で市民を導いてやっているという傲慢さは指摘しておかねばならない。

私は、科学者は「社会のカナリア」ともいうべき存在であると思っている。炭鉱に入る鉱夫は、カナリアを先頭にする。有毒ガスが少しでも発生していれば、カナリアはそれを感知して鉱夫に知らせるからだ。それと同じように、社会にとつて何らかの危険を察知すれば、科学者は前もってそれを市民に知らせる役割を果たさなくてはならない。専門的知識と経験によって、科学に関わる事項には想像力を発揮できる存在であるからだ。ともすれば善の側面からのみ科学がクローズアップされがちな現代において、事前の警告を与えることは科学者のなし得る社会への大きな貢献なのではないだろうか。「人間を大切に科学」に、そのような意味合いを込めている。

ここで、私が考える科学者の倫理キハンを提示しておこう。科学者は何があっても事実を正直に公開しなければならぬ。いかなる人間も正確な情報を得る権利があるからだ。それがあればこそ、最初は小さな混乱があるかもしれないが、結局人々は次の行動への的確な判断をするのである。いかなる理由があろうとも、情報の隠蔽や虚偽は科学者の倫理にもとると言わざるを得ない。

そして、科学者は現実を直視しなければならない。いかに自分の気に入らない結果であろうと、それをそのまま受け取ることである。実は、それは普段の研究において極めて自然に行っている行動で、思わしくない結果が出れば誤魔化さず受け入れ、別の方向を探っている。そこで敢えてデータを捏造ねつぞうしたり偽造したりはしていないはずである。Xという当たり前のことをよく知っているからだ。しかしなぜ、いざ社会的な事件になると現実を糊塗ことしようとするのだろうか。これは科学者としての倫理違反なのである。

もう一つは、真実に忠実（知的にセイジツ）であらねばならないということだ。自分の意見が間違っておれば潔くそれを認め、意見を変える点において吝かせうかであってはならない。これも普段の研究生活では毎日行っている習慣で、自分のアイデアや理論が間違っていればすぐに自然にそれらを修正しているからだ。しかし、いざIIIな

問題になるとメンツや自尊心、度量の狭さや政治的配慮などから、素直に認められなくなる。これも倫理的過ち以外の何ものでもない。

(2) これらの倫理を弁えて市民に接する態度こそが「人間を大切に科学」の根幹ではないだろうか。果たして科学は人間を大切にしてきたか、自分の今の行動は人間を大切にしているか、それを常に自分に問いかけ続ける習慣によって、社会に生きる科学となるのだと思っている。

(池内了『科学の限界』より)

問1 カタカナで書かれた傍線部ア～オのうち、次の二重傍線部に当たる漢字として最も適切なものを、次の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 19 ～ 23

|   |    |            |   |   |
|---|----|------------|---|---|
| ア | 19 | ライサン       | ① | 来 |
| イ | 20 | イツペン<br>トウ | ① | 踏 |
| ウ | 21 | サイヤク       | ① | 役 |
| エ | 22 | キハン        | ① | 規 |
| オ | 23 | セイジツ       | ① | 性 |
|   |    |            | ② | 雷 |
|   |    |            | ③ | 麗 |
|   |    |            | ④ | 礼 |
|   |    |            | ⑤ | 頼 |
|   |    |            | ② | 答 |
|   |    |            | ③ | 等 |
|   |    |            | ④ | 当 |
|   |    |            | ⑤ | 倒 |
|   |    |            | ② | 厄 |
|   |    |            | ③ | 藥 |
|   |    |            | ④ | 疫 |
|   |    |            | ⑤ | 記 |
|   |    |            | ② | 生 |
|   |    |            | ③ | 期 |
|   |    |            | ④ | 季 |
|   |    |            | ⑤ | 正 |
|   |    |            | ③ | 聖 |
|   |    |            | ④ | 誠 |
|   |    |            | ⑤ | 記 |
|   |    |            | ② | 静 |
|   |    |            | ③ | 期 |
|   |    |            | ④ | 疫 |
|   |    |            | ⑤ | 倒 |

問2 本文中の a ～ e に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。

解答番号は a ∥ 24 b ∥ 25 c ∥ 26 d ∥ 27 e ∥ 28

- ① そのためには      ② 少なくとも      ③ むろん      ④ おそらく      ⑤ しかし

問3 本文中の I III に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ  
選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。

解答番号は I II 29 II II 30 III II 31

- ① 対外的 ② 楽観的 ③ 間接的 ④ 原初的 ⑤ 平和的

問4 傍線部(1)「文化としての科学」とあるが、これはどのような科学か。最も適切なものを、次の①～⑤  
の中から一つ選びなさい。解答番号は 32

- ① 軍事や商業を目的として科学の発展を望む国家やスポンサーなどの投資に一切頼ることなく、世の中  
に役立つことなど一切考えず、好奇心の趣くまま純粹に自然が投げかける謎に挑戦し、自然の偉大さを学  
ぼうとする文化的な営み。
- ② 経済的・社会的な要因、あるいは有用であるか無用であるかなどの議論にとらわれることなく、好奇  
心や探究心を持って純粹に自然から発せられる疑問を解明することを目的とし、ときに社会がもつ自然観  
や世界観を一変させる可能性を持つ文化的な営み。
- ③ 高価な実験器具やコンピュータを提供する対価として一定の結果を要求する社会に屈せず、一般社  
会の中での存在価値などを考慮することなく純粹に自然の研究に勤しむことで、結果として膨大なムダの  
中から有用な概念や思想を得ようとする文化的な営み。
- ④ 人間の精神的活動の所産の一つであり、金銭の獲得を目的とせず自然に対する純真な好奇心を唯一の  
よりどころとして自然科学の研究に取り組むことで、現実的な利害から解放されるとともに社会への貢献  
を果たそうとする文化的な営み。
- ⑤ 投資を行う国家や企業などの外部からの有用、無用という評価に左右されることなく、科学の楽しみ  
を一般市民と共有することで、自然科学という学問の枠内にとらわれていた人間の可能性を開放し、社会  
全体で自然観や世界観を享受しようとする文化的な営み。

問5 本文中の空欄 

|   |
|---|
| X |
|---|

 に入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 

|    |
|----|
| 33 |
|----|

- ① 科学的事実は社会に評価を求めるべきではない
- ② 科学的事実は決して予想を裏切らない
- ③ 科学的事実に現実が適合しない場合がある
- ④ 科学的事実はときに現実を超越することがある
- ⑤ 科学的事実は人間の望みとは関係しない

問6 傍線部(2)「これらの倫理を弁えて市民に接する態度こそが「人間を大切に科学」の根幹ではないだろうか」とあるが、筆者は「人間を大切に科学」の根幹として科学者に何を望んでいるか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 34

- ① ありのままの結果を受け入れる度量を持つとともに自分の否を素直に認めることのできる倫理観を持ち、自らの専門的知識と経験から社会に危険が迫っていると想像できた場合は、情報をありのままに公開し、市民に警告を与える存在となること。
- ② 現実を直視しデータを捏造したり偽造したりすることなく、自分のメンツや政治的配慮にとらわれないう倫理観を持ち、社会に何らかの危機が迫れば自ら市民の先導役となり、社会的な事件に率先して関わろうとする存在となること。
- ③ 自分の気に入らない結果が出た場合に受け入れまいとしがちであるが、素直に現実の結果を受け入れることのできる社会的な土壌を整え、自分の理論に誤りがあれば直ちに修正しようとする素直さを持ち、科学に関わる社会的危険を察知した場合には専門的知識と経験によって市民を導く存在となること。
- ④ 何があっても事実を正直に公開して情報の隠蔽や虚偽を行うことをせず、現実の結果を誤魔化さず受け入れるとともに自分の意見にこだわることなく、市民が望めば自らの専門的知識や経験をフルに活用して警告を発し、社会に大きく貢献しようとする存在となること。
- ⑤ 自分の都合や社会の要求に関わらず現実の結果をそのまま受け入れる度量を持ち、市民を導いてやっているという傲慢さを持つことなく、何らかの危機が想定される場合には自らの自尊心と経験にもとづいて市民に警告を与える存在となること。



問7

本文の内容と合うものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は

35

- ① 科学は国家からの支援を受けることで純粋な知的活動としての機能を失い、軍事化・生産化としての科学技術を追求するという制約を課せられることになったが、普遍性や経済性を求める野心を捨てて「無用の用」としての科学に徹することで、文化としての科学を取り戻すことができる。
- ② 経済発展に重きを置く現代社会では文化の創造といえども何らかの金銭を必要とするが、それにとらわれては投資者からの制約を受けることになるため、社会や企業から完全に独立して科学研究を行うことで、再び文化としての科学という営みを取り戻すことができる。
- ③ 真理を追求する科学といえども、追求の道筋にはいくすじもの「物語」があふれているので、その「物語」をも科学研究の対象として取り込むことで、「文化としての科学」の幅が広がり、市民に夢や勇気、喜びを提供することへとつながる。
- ④ 科学には善用と悪用という二面性があり、どちらに傾くことも可能であるが、社会にどちらを選択させるかにおいては科学者の倫理が大きな意味を持っており、科学者は経済的利益などのプラス面を過大評価することも、危険性などのマイナス面を過小評価することも行ってはならない。
- ⑤ 常に事実には正直であれという科学者の倫理は当然のこととして普段の研究生活では行っているはずのことではあるが、科学者は人間を大切にしてきたか、今の行動は人間を大切にしているかを常に問いかけながら、人間の危機を救うための科学研究を行わなければならない。